

研究ノート

モルドバ出土ウイグル文字使用ジョチ・ウルス銅貨

Copper Coins of the Golden Horde with Uyghur Script Unearthed in Moldova

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

ジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）ではウイグル文字の刻まれた硬貨が各地で発行された。現在のモルドバ共和国コステスティ Costeshti でもウイグル文字が刻まれたプル銅貨 pul が作られた。

1309 年以降にコステスティで作られた新プル銅貨に刻まれたウイグル文字は bo-chan と読むことができる。これはモンゴル語で「錢貨 bochan を作る事を提挙（ダルガ）するの司」の漢語訳である「宝泉提挙司」の「提挙司」が省略された「宝泉」のウイグル文字表記だと考えられるので、意味は造幣局およびそのダルガということになる。

コステスティのような比較的大きな拠点において、地元の市場で使われる小額硬貨プル銅貨が作られつづけられた。1309 年のトクトの幣制改革以降、コステスティでは「宝泉」という漢語由来の行政用語の書かれたプル銅貨が発行されたが、当該時期は元朝で銅銭の鑄造と流通を再開した武宗カイシャンの至大幣制期にあたる。

キーワード 貨幣 モンゴル ジョチ・ウルス キプチャク・ハン国 ウイグル文字

図 モルドバ・コステスティ製造プル銅貨



注) 左面：ウイグル文字で下行 bo、上行 chan。右面：アラビア文字で kutlug bulsun yangi pul。量目 1.64 グラム、長径×短径 19 ミリ×18 ミリ、製造年未詳。

本来 3 ダンギ (2.34 グラム) あるはずのプルだが、新プルは 3 ダンギ未満となり、1 ダング (0.78 グラム) 程度のものも珍しくない。ウイグル文字が使用されることも例外とは言えない。ただし、bochan と刻まれた銅貨はコステスティでしか作られていない。

出所) ZENO.RU, #288904. <https://www.zeno.ru/showphoto.php?photo=288904>

1 モルドバのジョチ・ウルス銅貨

最初モンゴル人は文字を持たなかったが、チンギス・カンにウイグル人のタタトゥンガが印璽と文字の有用性を説いたことで、ウイグル文字が使われるようになったとされる¹⁾。

ジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）でもウイグル文字の刻まれた硬貨が各地で発行された。現在のモルドバ共和国コステスティ Costeshti でもウイグル文字が刻まれたプル銅貨が作られた。

地図 モルドバ共和国



出所) 筆者作成。

コステスティの銅貨には、アラビア文字で「新しいプルに幸あれ (kutlug bulsun yangi pul)」と書いてある面と、ウイグル文字が刻まれている面がある。研究の最初期ではウイグル文字だと思われず、クリミア総督のタムガだと考えられていた。

ところが研究が進み、bo-chin と刻まれているというのが定説となった²⁾。そもそもジョチ・ウルスの硬貨に諸王のタムガ（占有標）が入れられることはあつて

も、ダルガ（総督。造幣局長官でもある）のタムガが刻まれる例は管見に触れない。

bochin の意味は明らかになっていない。以下では、bochin ではなく bochan と読んだ上で、その意味について考察したい。

黒海北西岸、現在のルーマニアとモルドバ、そしてウクライナ・オデッサ州の一部にあたる地域には、1265 年頃からジョチの曾孫ノガイが駐留していた。当該地域ではウイグル文字の刻まれたプル銅貨が発行され、「サイン」と刻まれたものが作られた³。

本稿で取り上げるプル銅貨は「ヤンギ・プル」、つまり新しいプル銅貨で、1309 年のトクトの幣制改革以降に発行されたものである⁴。1299 年にトクトはノガイと戦って、ノガイは敗死した。その後、旧ノガイ領はトクトの派遣するダルガによって統治されたと考えられる。

ロシア語圏での緻密な研究の積み重ねの結果、図のプル銅貨が、bochin 型プル銅貨の最初期のものだということがわかっている。これ以降の銅貨ではどんどん字形が崩れてしまい判読が困難である。λ（ラムダ）型のタムガだと考えられたこともあるが、現在では否定されている。

2 モンゴルの造幣局・宝泉提挙司

モルドバで 1309 年以降に作られたジョチ・ウルスの銅貨には、bochin あるいは bochan と読めるウイグル文字が刻まれている。chin は chan と読み、「銭」・「泉」を意味すると思われる。bo は「宝」だとすれば、bochan は「宝泉」となる。

『元史』を見ると、宝泉都提挙司および宝泉提挙司は、元朝末期の順帝トゴン・テムルの至正 10 年（1350 年）に置かれた⁵。新たな紙幣である中統新鈔の印刷と、これの裏付けとなる至正通宝銅銭の鑄造が宝泉提挙司の役割である⁶。

しかしながら、世祖クビライの至元 30 年（1293 年）に、サンガの失脚に関連した粛清の一環で登場する張簡の役職名が「宝泉提挙」であり、クビライ期より貨幣発行に関する役職名に宝泉も使われていたことが分かる⁷。

金朝では紙幣の発行官庁は交鈔庫、宝券庫、宝泉庫、転運司と呼ばれていた。元朝では、交鈔提挙司、後に名称変更されて宝鈔（都）提挙司を、管印鈔提挙司

あるいは管押鈔提挙司と記した場合があり、前田（1973）は、「鈔を印する事を提挙する（ダルガ）の司」というモンゴル語の直訳だと推定した。金朝の交鈔庫などとは異なり、元朝の宝鈔（都）提挙司はモンゴル独自の制度に由来するもので、提挙とはダルガを意味する⁸。

宝泉の「泉」は同音の「錢」のことだが、鈔専一の長かった元朝においても、紙幣と錢貨を含む貨幣一般を指す漢語として宝泉が用いられていた。もとのモンゴル語に対して、宝鈔や宝泉など、複数の漢語訳が存在したと考えられる。

なお、中世モンゴル語で「錢」はウイグル語から借用した **bakir** であり⁹、プル銅貨は円形方孔でもなければ青銅製でもなく、中国銅錢とは異なる。

問題は、**bo** は「宝」を表すかどうかであろう。パスパ文字で至元通行宝鈔を表す際、宝鈔は **bav-chav** となっており、大都音で「宝」は **bo** ではなかった¹⁰。とはいえ、ウイグル文字で「鈔」は **chau** ではなく **cho** と記される場合があり¹¹、「宝」も **bau** ではなく **bo** と表記したと考えられる。

3 14世紀初頭の東西交流

造幣所にはダルガが派遣され、ダルガが硬貨に入れる文言やデザインを決めた¹²。

初期のジョチ・ウルスの官吏を見ると、アサン・サルタクタイの子（スグナク総督。中央アジア・スグナク出身）、アリー（ジャンド総督。中央アジア出身）、チンテムル（ウルゲンチ総督。後、イラン総督。西遼出身）、ノサル（イラン総督。ケレイト部族）、コヤク（首都サライの高級官僚。ウイグル人）などが挙げられる。漢児言語を操る漢人や非ムスリムのウイグル人のダルガもいたと思われる。きわめてまれな例だが、ジョチ・ウルスでも漢字「済国惠民」を刻印したディナール金貨が作られた¹³。

モンゴル帝国の初期では、帝国直轄領の都市ではダルガの名が刻まれた硬貨が発行された¹⁴。例えば、クリミア半島の主邑クリム（現在のスターリィ・クリム）ではダルガのテムル・ブカの名が刻まれた銀貨が作られた。ジョチ・ウルスでは1264年以降、ジョチ家当主や諸王の名やタムガが硬貨に入れられることはあっても、大元のカアンが派遣したダルガの名が刻まれることはなくなった。

1309年以降にモルドバのコステスティで作られた新プル銅貨に刻まれたウイ

グル文字は *bochan* と読み、モンゴル語で「錢貨を作る事を提挙（ダルガ）するの司」の漢語訳である「宝泉提挙司」の「提挙司」が省略された「宝泉」と考えられるので、意味は造幣局およびそのダルガということになる。

武宗カイシャンの下でモンゴルの再統一がなされ、元朝とジョチ・ウルスの交流も活発化したと思われる。例えば、北コーカサスのマージアルではパスパ文字が刻まれた銀貨が作られた¹⁵。

コステスティのような比較的大きな拠点において、地元の市場で使われる小額硬貨プル銅貨が作られつづけられた。1309年のトクトの幣制改革以降、コステスティでは「宝泉」という漢語由来の行政用語の書かれたプル銅貨が発行されたが、その初期は元朝で銅銭の鑄造と流通を再開したカイシャンの至大幣制期にあたる。

これまで同じ時期に実施されたカイシャンとトクトの幣制改革が関連付けられることはほとんどなかった。モンゴル帝国の最西端のモルドバで「宝泉」と刻まれた銅貨が発行されたということは、東の元朝の行政用語が西のジョチ・ウルスに伝わったことを意味する。コステスティのプル銅貨は、ジョチ・ウルスと元朝の交流を表すものだと言えるだろう。

注

1 『元史』、卷 124 塔塔統阿伝。

2 Кривенко(2020)。

3 Nyamaa(2005), p.103、安木 (2017)。

4 安木 (2023)、71 頁～72 頁。

5 『元史』、卷 42、順帝 5。「(至正 10 年冬十月) 辛丑，置諸路宝泉都提挙司於京城。(中略)(十一月) 己巳，詔天下以中統交鈔一貫文權銅錢一千文，準至元宝鈔式貫，仍鑄至正通宝並用，以実鈔法，至元宝鈔通行如故。(中略)(至正 11 年冬十月) 癸未，立宝泉提挙司於河南行省及済南、冀寧路等凡九，江浙、江西、湖広行省等处凡三。」

6 詳細は宮澤 (2007)、273 頁～277 頁。

7 『元史』、卷 173、崔彧伝。「宝泉提挙張簡及子乃蛮帶，告(崔)彧嘗受鄒道源、許宗師銀万五千両；又其子知微皆訟彧不法十余事。(以下略)」

8 前田 (1973)、48 頁～49 頁。

9 前掲書、29 頁。

10 中村 (2011)、1 頁～2 頁。

11 庄垣内 (1987)、65 頁。

-
- ¹² 安木 (2023)。
¹³ ZENO.RU, #281935。
¹⁴ 安木 (2023)。
¹⁵ 安木 (2015)。

参考文献

・資料

『元史』、中華書局点校本。

Кривенко, А., (2020) Каталог джучидских медных монет Костештского поселения, по материалам статьи Кривенко А.В., Гончарова Е.Ю., Медные монеты золотоордынского города в Костештах. Тирасполь, Москва. 2020.
ZENO.RU(<http://www.zeno.ru>)

・研究論文

庄垣内正弘 (1987) 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『神戸市外国語大学外国学研究』、17、17 頁～156 頁。

中村雅之 (2011) 「至元通行寶鈔のパスパ文字」『KOTONOHA』、101、1 頁～2 頁。

前田直典 (1973) 『元朝史の研究』、東京大学出版会。

宮澤知之 (2007) 『中国銅銭の世界 一錢貨から経済史へ』、思文閣出版。

安木新一郎 (2015) 「貨幣が語る中央ユーラシアの歴史」、佐島隆他編 (2015) 『国際学入門』、法律文化社、135 頁～140 頁。

安木新一郎 (2017) 「ウイグル文字使用ジョチ朝銅貨」『京都経済短期大学論集』、25 (1)、61 頁～63 頁。

安木新一郎 (2023) 『貨幣が語るジョチ・ウルス』、清風堂書店。

Nyamaa, B.(2005) *The coins of Mongol Empire and clan tamgha of khans(XIII-XIV)*, Ulaanbaatar, Mongolia.